

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K11809

研究課題名（和文）植民地台湾「少国民世代」の戦後史に関する基礎研究

研究課題名（英文）A foundational study on the post-war history of the "Youthful Nationals Generation" in colonial Taiwan

研究代表者

洪 郁如 (KO, Ikujo)

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：00350281

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本課題は、台湾人「少国民世代」の戦後史を東アジアの政治変動の角度から考察し、社会史研究の手法により、その世代の特徴と地域史における重要性を考察してきた。日本の植民地学校教育を受けた1930年代生まれの台湾人のなかで、大学以上の高学歴の保有者を対象として、その進学、就職先を追跡しながら、台湾・米国・日本に跨る現地調査を実施すると同時に、台湾語、日本語、中国語、英語が混在する複雑なインタビュー記録のテープおこしとデータベース化作業を行った。また、教育政策の関連文書などを収集し考察もを行い、東アジア冷戦体制の力学が、当該世代のライフ・コースに与えた影響を析出してきた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本課題は、以下のような意味で先見的な意味を持つ：1930年代生まれの台湾出身者の経歴と思想が日台の政界、学界、文学界などに与えた影響は一般に認知されてはいる。そのなかで本研究は、世代の特徴に着目し、聞き取り調査の成果を中国語、日本語、英語で書かれた私家版、手稿などの回想録、政府資料とつぎ合わせる作業を行った。台湾の「少国民世代」の社会史的特徴について、戦後国家の境界を意識的に超え、帝国日本のその後を広域的な視点から具体的に描き出した。その成果は、書籍、論文、講演の形で発表された。さらに、台湾の歴史研究者とも意見交換を行い、本課題を通して得た知見は、台、日、米の戦後史に有益である点を確認できた。

研究成果の概要（英文）：This project has examined the post-war history of the Taiwanese "Youthful Nationals Generation" from the perspective of political changes in East Asia, using the methods of social history research to explore the characteristics of this generation and its importance in regional history. Among the Taiwanese born in the 1930s who received education in Japanese colonial schools, the study focused on individuals with higher education degrees and tracked their educational and employment paths. Simultaneously, local investigations spanning Taiwan, the United States, and Japan were conducted, along with the transcription and database creation of complex interview recordings in a mixture of Taiwanese, Japanese, Chinese, and English. Additionally, relevant documents such as educational policies were collected and analyzed. Through this, the dynamics of the East Asian Cold War system and its impact on the life courses of the generation have been elucidated.

研究分野：台湾近現代史

キーワード：世代 戦後 植民地教育 少国民 台湾 留学

1. 研究開始当初の背景

戦後日本で「少国民世代」という用語は、主に日中戦争および第二次大戦中に小学校時代を過ごした1930年代生まれの人々を指している。歴史や文学の領域においては、従来の研究者の関心は戦時下でこの世代の日本人が受けさせられた軍国主義的思想の内容や、銃後の軍事動員と空襲・疎開を含む戦争体験、「戦後」をめぐる「少国民世代」の思想的な特徴に集中してきた。日本統治期の台湾でも同時代的に「少国民世代」が形成されたが、戦後日本の学界でこの世代の存在とその意味についてはあまり顧みられることはなかった。戦前生まれの「日本語人」と戦後生まれの「中国語人」という安易な二分法が、これまで台湾社会に対する世代認識として普遍的に用いられている。

また台湾の学界にも、二つの問題点が存在している。第一に、戦争時期に小学生だった台湾人を一つの世代として捉えてこなかったこと、そして第二に、帝国植民地の「少国民」の戦後についての問題意識が欠如している点である。戦争期の「少国民」に関する研究は皆無ではないものの、それらはとりわけ植民地児童が体験した皇民化運動、軍国主義教育、銃後動員の実態のみに関心を寄せており、「少国民」のその後については不問のままである。

本研究の開始当初は、以上の問題を克服すべき課題として意識し、植民地台湾の「少国民世代」の戦後史という未開拓分野に挑むための基礎研究を目指した。

2. 研究の目的

本研究の目的は、台湾人「少国民世代」の戦後を、台湾と日本をはじめとする東アジアの政治変動の角度から考察し、その世代的特徴と重要性を提示することにある。具体的には、第一に、戦前から戦後への政治変動、政治権力の交代がもたらした重層的な教育経験について、世代の視点からその社会史的意味を探ることである。台湾をケースとする本研究に即していえば、帝国日本から中華民国へと変わっていく過程の中で、それぞれの個人のライフ・ヒストリーにおいては、戦前の「少国民」経験がそれぞれの戦後の進学、就職をはじめとする人生の展開といかに接合され、どのように解釈され、機能したか。第二に、台湾人「少国民世代」が、「帝国の後」の時代にどのような社会的機能を果たしたのか、植民地経験と記憶の個人史における位置はいかなるものであったか、この二つの側面から学術的な検証を行うことである。

3. 研究の方法

研究方法として、二つの分析軸を設定した。第一に、空間軸である。「植民地」「内地」の異同に目配りながら、小・中学校時期が植民統治、戦争と重なったこの世代の特徴を、帝国日本の支配領域という広い視野から洗い出し、さらに戦後の進学と就職をきっかけに、台湾、日本、米国などに広がっていった同世代の高学歴保持者らの空間移動を考察した。第二に、時間軸の面からも、「帝国の子供たち」の「戦後」を問いかけ、「帝国の子供たち」の「その後」に焦点を当て、日本の少国民として育てられてきた植民地台湾の児童が、中華民国体制下に置かれたことにより、如何にしてそれぞれの「戦後」に向かったかを考察した。

具体的な調査の実施においても、二つの側面からアプローチした。第一に、台湾人「少国民世代」に対し聞き取りと調査データベースの蓄積に取り組んだ。日本の植民地学校教育を受けた1930年代生まれの台湾人のなかで、大学以上の高学歴保有者を対象として、その進学、就職を追跡し台湾・米国・日本に跨る聞き取り調査を実施すると同時に、データベース構築のための文字化作業を行った。帝国日本からの離脱、中華民国政府への編入という急激な環境の変化で、インフォーマントらがその思想、日常生活においていかなる影響を受け、対応したのかについての語りを採集し、記録した。第二に、1940年代後半から1960年代まで台湾の教育制度と内容の変遷、政治経済の変動に関する文献調査を行った。オーラル・ヒストリーの裏付け作業として、戦後初期の米華、日華関係を把握するために、中華民国政府の教育政策、および米国、日本を渡航先とする留学政策の関連文書、統計、新聞雑誌の記事などを収集し、制度面からの考察を行った。この作業を通じて、東アジアの「戦後」、とりわけ冷戦体制の力学が、当該世代の個人々のライフ・コースに与えた影響を明らかにした。

4. 研究成果

一次データの蓄積においては、2018年はアメリカのハワイ州、2019年はアメリカの南カリフォルニア、2023年には台湾を中心に、台湾人「少国民世代」の戦後史に関する資料収集と聞き取り調査を実施した。その間、新型コロナウイルス感染症が世界中に拡大し、海外渡航が不可能であった時期には、高齢のインフォーマントたちに負担を掛けない範囲で、Zoomによるオンラ

イン・インタビューや電子メールによる書面調査を一部実施した。当該世代の戦前の日本経験と中華民国時期の戦後経験の歴史的な意義を、とりわけ東アジアの冷戦体制における政治変動の視角から総合的に把握してきた。日本の植民地教育を受けた1930年代生まれの台湾人のなかで、大卒以上の高学歴の保有者を対象として、その進学、就職先を追跡しながら、台湾・米国・日本に跨る現地調査を実施すると同時に、台湾語、日本語、中国語、英語が混在する複雑なインタビュー記録のテープおこしとデータベース化作業を行った。

文献資料の収集においては、アメリカ、台湾、日本を中心に台湾人「少国民世代」に関する英文、和文、中文の出版物、書簡、写真、回想録、刊行物を入手した。戦後初期の米華、日華関係を把握しながら中華民国政府の高等教育政策、留学政策、統計資料、新聞・雑誌記事などを収集し、制度面からの考察も行った。帝国日本からの離脱、中華民国政府への編入という急激な環境の変化で、青少年が被った影響に関する記録も丁寧に採集した。

以上の複数のデータに基づき、台湾における「少国民世代」の社会史的特徴について析出し、戦後国家の境界を意識的に跨ぎ、帝国日本のその後について、広域的な視点から具体的に描き出し、その戦後史における意味を明らかにした。

第一に、日本教育を受け、日本語を話せる世代は、一括して「日本語人」や「日本語世代」として括られ、「日本」とそれに伴う帝国経験を内面化していたと見做される傾向がある。しかし、当該世代の最年少グループとなるこの世代集団は、個人史の軸で見れば、1945年以前に日本教育を受けた時間は、戦後に中華民国期教育を受けた時間に比べても大きな差はない。青年期に米国留学と定住を選択した台湾知識人集団の場合、その後の米国の生活を経験した時間が、むしろ大きな比重を占めていた。外在的な政治社会の変動と基準によって区切られ、認識されてきた世代間の断絶は、この世代の一個人の成長過程の中ではむしろ連続している。それは一個人の内面における葛藤、克服や妥協の体験なのである。

第二に、戦後の個人史からわかるように、日本統治期に受動的な形で、無意識のうちに身につけた「帝国経験」は、実のところ多岐にわたる内容を含んでいた。戦前期の日本による学校教育は、道なかばの1945年に突如として幕を閉じることになったが、それまでの学習の蓄積は、決して「帝国経験」という倉庫に眠ることはなかった。植民地出身の青少年たちはその後、必要性に応じてそれぞれの人生の各段階で「帝国経験」の倉庫に納められた何かを取り出し、自らの努力によりそれらを補い、使用可能なように仕立てた。「帝国経験」のパッケージには、国語であった日本語だけではなく、日本文化に関わる教養や知識体系、日本人との学縁を契機とする多種多様なネットワークが含まれていた。そこには幼少期や青少年期の体験から生じた感情面の要素もありながら、それらの経験を濾過しつつ、自らの人生に必要なものだけを意識的に取り出してきたものである。このような「文化」「社会関係」の経験的総合体は、「文化資本」「社会関係資本」と見做されがちだが、そもそも外部の政治環境によってマイナスの方向に作動することも多く、慎重に捉える必要がある。「資産」「資本」といった言葉に内包されるプラスの意味合いについては、特に用心深く、留保をつけなければならない。日本語を話すことができ、日本文学に親しみ、日本に友人・知人を多く持つことから、それらの人々が「日本統治時代を懐かしむ」心情を持ち、ましてや「親日」の傾向を持つとみなすのは危険であろう。

第三に、台湾系アメリカ人の歴史における同世代の存在も強調したい。1950-1960年代に戒厳令が敷かれた台湾では、多くの大学卒業生が更なる発展を求め、アメリカを目指した。かつての帝国時代、植民地のエリート家庭出身の子供たちの多くも、太平洋を渡る青年たちの移動の中にいた。北米の台湾独立運動に関する研究では、留学生を中心とする彼ら・彼女らの存在自体は知られているものの、世代の観点よりは、運動史的な視点がほとんどである。戦前の教育を受けた親たちの「日本語世代」、戦後に中華民国教育を受けた子女たちの「中国語世代」。こうした家庭の子女の多くは渡米し、親世代とは異なり、日本との交流にも英語を使用するため、米国で生まれ、英語を母語とする孫たちを含む「英語世代」と一般的には括られる。実は、これらのカテゴリーに収まりきらない特徴を持つ世代が存在したことを、本課題ではみてきた。彼ら・彼女らのライフ・ヒストリーは、日本、台湾、米国をまたぐ近現代史の縮図である。

こうした成果を日本語、中国語、英語による単著、学術論文、講演などの形で発表した。さらに本課題を通して得た知見につき、台湾の歴史研究者とも意見交換を行った。本課題が析出した「少国民世代」の視点、すなわち人の移動と世代間の差異に着眼する本研究の意義は大きく、台、日、米の戦後美術、経済、水利史などの領域における個人史に対しても有益である点も同時に確認できた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 洪郁如, 北村嘉恵, 構成=新田龍希	4. 巻 2
2. 論文標題 誰の台湾史 生きられた歴史からの問い	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 早稲田大学台湾研究所ワーキングペーパーシリーズ	6. 最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 洪郁如	4. 巻 -
2. 論文標題 日本統治時代をどう考えればいいのか? - 「過去」を語る「現在」 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本台湾教育支援研究者ネットワーク編『台湾書旅: 台湾を知るためのブックガイド』紀伊国屋書店、台北駐日経済文化代表処台湾文化センター	6. 最初と最後の頁 158-159
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 洪郁如	4. 巻 -
2. 論文標題 台湾研究與台日関係有何關係? 學術與教育、政治外交與跨國情誼	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 林果顯編『東亞視野下の人権議題』国立政治大学台湾史研究所、国家人権委員会	6. 最初と最後の頁 132-157
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 洪郁如	4. 巻 2(2)
2. 論文標題 大和民族的衣裳: 近現代東亞場域中和服論述、資本與性別政治	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Taiwan Lit	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 洪郁如	4. 巻 -
2. 論文標題 尋找散落的珍珠：一張近代台灣女性的文學書寫地圖	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 王鈺女亭 編『性別島讀：台灣性別文學的跨世紀革命暗語』聯經 所収	6. 最初と最後の頁 68-79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 洪郁如	4. 巻 -
2. 論文標題 學歷・女性・殖民地：從台北女子高等學院論日治時期女子高等教育問題	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 許佩賢編著『帝國的學校・地域の學校』國立台灣大學出版中心	6. 最初と最後の頁 231-271
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 洪郁如	4. 巻 56
2. 論文標題 ある台湾人少女の帝国後：嶺月の文学活動と脱植民地化	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語文化	6. 最初と最後の頁 79-97
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15057/30949	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 洪郁如	4. 巻 -
2. 論文標題 ジェンダー・階層・家族	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 若林正文、家永真幸編『台湾研究入門』東京大学出版会	6. 最初と最後の頁 75-83
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 洪郁如	4. 巻 55
2. 論文標題 彼女たちの「日本時代」：植民地台湾の製帽業にみられるジェンダー・階層・帝国	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語文化	6. 最初と最後の頁 35-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15057/30113	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 洪郁如	4. 巻 16
2. 論文標題 もう一つの「日本時代」 近現代台湾女性の識字とエンパワーメント	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 中国語中国文化	6. 最初と最後の頁 31-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 洪郁如	4. 巻 10
2. 論文標題 日治台湾女子教育的夢與現実	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 薰風	6. 最初と最後の頁 46-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件(うち招待講演 17件/うち国際学会 1件)

1. 発表者名 洪郁如
2. 発表標題 當我們的台灣愛重返殖民地：從在台日本人的「一冊日記談起
3. 学会等名 台湾、国立清華大学台湾文学研究所(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 發表者名 洪郁如
2. 發表標題 「日本時代」思想起：個人史，社会史，国史の交錯與對話
3. 学会等名 台湾、国立台湾師範大学台湾史研究所（招待講演）
4. 發表年 2022年

1. 發表者名 洪郁如
2. 發表標題 探討日本「帝国学知」的幾個視角
3. 学会等名 台湾、国立政治大学國際漢学講座 「帝国学知與近代台湾」（招待講演）
4. 發表年 2022年

1. 發表者名 洪郁如
2. 發表標題 「台湾」的位置：從帝国学知，地域研究到教学現場
3. 学会等名 台湾、国立政治大学國際漢学講座 「帝国学知與近代台湾」（招待講演）
4. 發表年 2022年

1. 發表者名 洪郁如
2. 發表標題 性別與歷史研究：再談「帝国学知」的內與外
3. 学会等名 台湾、国立政治大学國際漢学講座 「帝国学知與近代台湾」（招待講演）
4. 發表年 2022年

1. 発表者名 洪郁如
2. 発表標題 大和民族的衣裳：近現代東亞場域中和服論述、資本與性別政治
3. 学会等名 「東亞共同体下の歴史與文化」 台北大学、台湾（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 洪郁如
2. 発表標題 『誰の日本時代：ジェンダー・階層・帝国の台湾史』著者 洪郁如さんインタビュー
3. 学会等名 ブック・ラウンジ・アカデミア（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 洪郁如
2. 発表標題 台灣研究與台日關係有何關係？ 學術與教育，政治外交與跨國情誼
3. 学会等名 「近代東亞文明新秩序與人権」 国立政治大学、台湾（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 洪郁如
2. 発表標題 學術的社會實踐與台日教育交流：台湾自然人文科學知識整合之展望
3. 学会等名 国立台湾大学地質科學系研究所、台湾（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 洪郁如
2. 発表標題 日本の台湾認識とジェンダー
3. 学会等名 第52回CGraSS公開レクチャー・シリーズ 一橋大学大学院社会学研究科ジェンダー社会科学研究センター（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 洪郁如
2. 発表標題 誰の台湾史 生きられた歴史からの問い
3. 学会等名 早稲田大学台湾研究所ワークショップ（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 洪郁如
2. 発表標題 台湾の「日本時代」を考える
3. 学会等名 九州大学台湾スタディーズ（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 洪郁如
2. 発表標題 如何記憶？從何訴說？日本與台灣的空襲和戰爭經驗
3. 学会等名 台湾 国立政治大学（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 洪郁如
2. 発表標題 脱植民地化と文学活動：「少国民世代」台湾人女性の戦後史
3. 学会等名 中国女性史研究会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 洪郁如
2. 発表標題 少女たちの帝国後 台湾人女学生の脱植民地化
3. 学会等名 国際シンポジウム「帝国 日本をめぐる少女文化」（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 洪郁如
2. 発表標題 與作者有約：台湾近代女性史
3. 学会等名 台湾 国立台湾師範大学 台湾史研究所（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 洪郁如
2. 発表標題 女也們的「日本時代」：性別與階層的歷史研究方法論省思
3. 学会等名 台湾 国立政治大学 台湾史研究所（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 洪郁如	4. 発行年 2021年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 306
3. 書名 誰の日本時代：ジェンダー・階層・帝国の台湾史	

1. 著者名 洪郁如 編著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 國立臺灣大學出版中心	5. 総ページ数 388
3. 書名 性別與權力	

〔産業財産権〕

〔その他〕

一橋大学大学院社会学研究科 教員紹介 https://www.soc.hit-u.ac.jp/teaching_staff/ko.html

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------